

研究

わがふるさと、元田誌 (四)

従軍記録 (一) (承前)

(紹介) 市野瀬 仁

(一) 陸軍 谷川 功

私は昭和十四年十二月一日、現役兵として熊本野砲兵第六聯隊に入隊して、約一か月、一期の検閲を終えると同事の支那事変に参加した。

忘れることのできない昭和十五年一月二十七日、門司港を出帆する際の盛大な見送りに、これが母國の見納めかと思えて、何んともいえない感慨を憶えた。

天津の門戸に当る太沽に上陸したのが二月一日午前零時で、始めて戦地に来たのだという感じがした。そこから汽車で約一週間、やっと目的地の山西省解州城に着いた。そこで山砲兵第三十七聯隊に配属され、冬、三五四六部隊と命名された。

戦地といえは毎日競争しているものとはばかり思っていたらそうではなく、戦闘の合間には次の準備をしたり、警備に当たったり、休養をとったりすることもあった。

なんといつても一番うれしいのは、内地からの便りを見たり、慰問袋を手にした時であった。そんな時はどんな兵士も子供のように喜んだものである。一番困ったのはシラミの発生で、千人針にはいつも何十匹がくっついてた。

私の初陣は十月二十六日から、陌南鎮の掃蕩戦で、次いで十二月十日から翌年一月二十一日まで西方作戦に参加した。ところが十六年三月に十五軍撃滅作戦の戦間において私は負傷し、運城陸軍病院に入院した。

退院してからは各地の警備に着いたが、十六年八月、滬甯砲撃戦間、十月から十一月に粉西作戦、十七年一月に済源県河岸肅正戦間に参加した。零下三十度の極寒での生活は、南国育ちの私達にはひどくこたえた。

昭和十七年五月から九月まで、一転して南支の浙贛作戦に参加した。この戦間が私達が一番苦勞したもので、長い戦いであった。何分、北支から上海まで汽車で南下し、それから連日の行軍が続き、約一週間はかりして戦間を開始したのである。

北支の戦間とは全く勝手が違う。気候の変化と連日の戦間を四か月に続けられ、さすがに馬共々やせ衰えてしまった。軍服・軍靴はぼろぼろとなり、炎熱でかどは湯き、水はなく、クリークの水面には死体が浮かび飲まねば、まさに戦場ならでは見られぬ、凄惨な光景であった。

やっと杭州を占領して任務を終ったわけであるが、ここで海軍さんと一緒になる機会を得た。しかしそれもほんの一時であった。海軍さんは別れがわに

「陸さん、國に便りはありませんか。胡晚及佐世保に帰りますから」と言われた時には、海軍さんがうらやましいやら、自分が情けない気がした。

私達は再び北支の駐屯地に着いた。ここで警備中、部隊の編成替えがあった。生きて再び内地に帰ることはいかぬかもしれないと思っていたのが、突然、内地帰還命令である。この時の嬉しさは最高のものであった。後

に残る戦友に固い握手を交わし別れをつけて、約五年ぶりで日本の土を踏んだのである。

今、過ぎし日のことを思えば夢のようで、苦しかったこと、嬉しかったことも数々あった。二度と行くこともない珍らしい所も見学した。その一つに、北京の砲兵学校にいた頃、萬新山に遊びに行ったことがある。ここは昔のおとき話しに出てくる龍宮城であったという伝説がある。なるほど、浦島太郎が虜に乘っている像が池の中にある。実にきれいな所であった。

私には戦争を思い出す印として、従軍記章に論功行賞をいただいている。これだけは今も大切にしまっている。

(二) 陸軍 小野 重信

思えば、今から三十五年前の昭和十五年三月一日、私は熊本工兵第六聯隊に入隊した。ご承知のように、零細農家の二男として生まれ私私報國の精神に燃え、軍人で一生を過ごす覚悟で、まず下士官候補者に志願した。

やがて合格者二十八名の中に加わり、陸軍工兵学校に入校した。入校して四か月の短期間には、それはそれは厳しい教育を受けた後、十六年十二月に原隊に復帰した。それから、佐長、軍曹ととんとん相子に連級し、初年兵教育要員として残留した。

十八年に今の北朝鮮平壤市に師団が創設され、この工兵隊に転属した。それから翌十九年二月に陸軍戸山学校に、体操・剣術の指導者養成員として入校することとなった。それから、わずか三か月間して平壤師団に勤員令が下されたので、直ちに原隊に復帰した。

ここでも落ちつく暇もなく、六月上旬には釜山港を出航し、下関の沖合いで船団を組み、南方に向けて進む。途中は魚雷を除けるために蛇航を続けた。その間、沖繩

・台湾・フィリピンのマニラと、燃料補給のため寄港した。目ざすはミンダナオ島、道路整備と橋の架設が任務の我が隊は、同島のサンボアンに上陸した。

ここに二週間ばかり駐屯し付近の橋梁架設を行った。以後、ダバオに向けて行軍の途中、私以下五名は急行して初年兵の受領を命ぜられた。二日間であつたが初年兵五十七名を受領して、全員無事引率を終えたことを部隊長に報告した。

私はこの日付で初年兵隊の小隊長を命ぜられた。この初年兵は沖繩人が主で、満二十才から四十才までの者で、現地で麻などを栽培していた人達ばかりであつた。従つて気候・風土になれ、現地人と自由に話せる者ばかりで、実に好都合であつた。

その後、戦局は悪化するばかりで、食糧事情は苦しくなる一方であつたが、私は初年兵のおかげで現地民から雞や卵、水牛の牛肉、黒糖、バナナ等をもらつてきたので、誰よりも好運児であつたと思う。ある時は水中爆破で魚を獲つたり、唐芋畑を捜してまわるかんびりした日がかかり続いた。

作業はゴム林の中に防空壕やタコツボを掘るのが日課であつた。二十年三月一日付で私は背長に昇任した。

三月十日敵機の来襲を受けるや、ゴム林はことごとく焼野が原と化してしまつた。その夜から急転直下、私達の苦難が始まつた。この時最後の食糧として執下一杯の米を配つて以来七か月間、昼間は密林で休養し、夜間は三つほど程度の距離を山奥へと逃げ込んだ。

こうして草の葉で塩気もない汁をすすっている内、次第に体は弱まり栄養失調となつた上マラリヤにかかり、そこそこ死体を見る日が何日も続いたが、どうするこゝとまできない。水虫に食われた足を引きずりながら行軍

する有様であった。

八月十五日、終戦になったことも知らずにたまたま逃がらばかりで、そのさまは筆舌につくしがたい哀れなありさままであった。終戦から二か月目の十月十五日に、このまま食糧のない山奥生活では全員餓死すると判断して、川口を目標として前進を開始した。

時は昼前、突然わが隊の名を大声でさけぶのを聞いた。ジヤングルの中かえ姿は見えず、じつと聞き耳をしていらした師団本部の將校とわかり、抱き合って喜んだ。兵は全員最後まで元気を振りしぼって川迎まで出た。ここで篋を組み、翌朝より三人一組で篋に乗り、川口のカガヤン收容所に二日後に着き、米軍の給食を受けた。

ここの收容所は、同市の刑務所であった。それからい千島の大收容所に移されたが、途中に見る海岸の椰子の葉は引きちぎられ、無傷のものは一本としてなく、敵前上陸の激しかった様子がかがわれた。ここでの約二か月間のうち次第に体調は回復し、十二月十二日に浦賀に上陸した。二日間滞在中、日本兵らしい服装をもらって帰路につき、二十日昼過ぎなつかしいわが故郷に帰宅したのである。

今つくづく思う。八月十五日終戦になったことを知っておれば、戦病死した大部分の兵が帰還できたものを。あの二か月間に餓死していった戦友に対し申しわけなく、あらためてご冥福をお祈りする。

人間は何んといつても健康と運であるとと思う。私が今日あるのは健康に恵まれ、冲繩人を主とした初年兵の小隊長となり、行動を共にしたおかげである。初年兵諸君に對して心から感謝しながら、ペンをおくものである。

(三) 陸軍 市野瀬信義

昭和十六年二月の下旬、私は大坂港を出航し、満洲國の大連港に上陸して新京に到着、関東軍独立守備隊に現役兵として入隊した。

見渡す限り銀世界の雪の広野と、その寒さにびっくした。そして凍結した道路や、広場の隅にゴロゴロしている凍死者を見た時は、異郷の地のさびしさをまざまざと感じた。

新京の部隊で一期の検閲を終えた私は、六月に海城陸軍病院に転属し、衛生教育の前期を習得した。九月に遼陽第二陸軍病院に転属、三か年半遼陽で勤務して、昭和二十年三月内地に転属し、終戦となり復員した。

以上が私の兵歴の概要である。外地といつても当時の満洲は内地同様で、直接の戦場ではなく、勤務は特筆すべき事柄はなかった。しかしながら、内地では想像もできない広大な原野と、大陸特有の気象の中での素朴な満洲人とのふれ合い、重症者の看護や原隊復帰者の護送、野外作業、スケート大会、城址見学等を味わうことができた。四年半の青春は悔いはなく、元気で復員できたことを感謝している。

戦没者のご冥福を、心からお祈りする次第である。

(四) 海軍 宮本 武 (旧姓市野瀬)

昭和十五年六月一日、私は海軍志願兵として佐世保海兵団に入団した。そしてその十一月新兵教育を終了した後、支那方面艦隊の旗艦艦手に乗り、青島方面より旅順港までの警備についた。

中国人ともだいが馴れた頃、十七年五月私は横須賀海軍砲術学校に入校して、三か月間大砲の訓練を受けた。

卒業と同時に航空母艦機隊の高角砲の砲手として勤務
「直ちに対空戦闘配置につけ」のラッパの音と共に、始
めて戦争の真只中に飛びこんだ。本艦の戦闘機も二機未
帰艦となり、敵の空母も小破程度で、ひとまずラッパ
島へ休息のため入港した。

十日程たつて出撃命令が下るや、艦は南へ南へと進撃
し、ニューギニア北方三十海里の地点で味方の偵察機か
ら、「敵空母発見、我が空母より戦闘機発艦、攻撃機が
魚雷をばいて空艦、間もなく敵機発見」の報がある。

やがて、トンボのように小さく上空に飛ぶ敵戦闘機を
見るや、爆撃機・攻撃機が次々に現れた。我々は対空戦
闘の位置から、今か今かと息をひそめていると「打ち方
始め」のラッパが鳴りひびいてきた。パリパリパリと
豆をいるように機銃の連射、機銃の火道と高射砲の火が
入り乱れての、凄絶な戦闘が続く。

突然、三番砲塔に爆弾を受け火炎を起こしたが、すぐ
消し止めて戦いは一度終り、敵機も引き揚げていった。
この戦いを、南太平洋海戦といっている。

特設流れて、艦は内地へ修理に帰った。それから私は
佐世保海軍警備隊へ入隊して、内地の心地よい生活をし
ていく味あった。

昭和十九年一月、私は第三〇二船舶防空隊として、ト
ラック島の南の島、エンタービー島へ上陸した。私は機
銃の射手として連日の爆撃に對戦し、終戦までその防
空に勤務したわけである。

ここで一つ、異郷の風物に接して、戦争でなければ味
わえない生活をこ紹介しよう。

ここの原住民は、ドイツ系のカナカ族である。この島
で日本兵は米粒を一年程食べておらず、

木の葉やトカゲを食べて命をつないでいた。特折り原住
民からもらって食べるヤシの実が、一番のご馳走であつ
た。とくにヤシからとれる酒は特別うまかつたが、腹い
っぱい飲めるわけのものではなかつた。

そのうち栄養失調のため死者が続いて出ると、今度は
自分の番がくるのではないかと、いう不安がつり、言い
知れぬ感情におそわれた。しかし反面、夜は原住民のハ
ダカ踊りを見て慰安してもらい、夕ロイをこ馳走にな
り楽しかったこともあつた。

いよいよ陸上での食べものがなくなると、敵機のこと
い時間を見計らつて原住民とカヌーに乗り、とある場所
に手榴弾を投げこむと、かまりの魚が腹を白く見せて浮
き上る。原住民は五分位海中に潜つて、大きな魚を取り
上げてくる者もある。我々には醬油がないので、海水を
罐詰の空罐に入れて塩をとり、塩焼きにして食べた。

この外、珍らしいものとして、パンの木といつて、木
にパンがなる。雄パンと雌パンがあり、雄パンはポコポ
コしておいしく、甘藷のふかしたような味がする。雌パ
ンには中に種があつて、それが栗のような味がする。雌パ
ン全体は甘く、朝方早くいつてみると、木の葉の上に枯
がって落ちていくので、それを集めて罐詰の空罐に入れ、
炊くと汁粉ができる。その味はなんともいえず忘れるこ
とができない。

しかし、パンのとれる時期が短くて、二か月位だつた
ので、それがすむと再び木の葉やトカゲの食事にはい
るといった具合で、毎日が食べることの戦争であつた。

昭和十九年十二月頃、ノースアメリカンB25の爆撃機
二十機ばかりが飛来し、多くの戦死者が続出した。私も
足と腰に負傷したが、よいしたことはならなかつた。

昭和二十年も、また食べることの戦いに明け暮れてい

だが、十月頃、アメリカカ駆逐艦に迎えられて、始めて
終戦を知り、久しぶりで米のごぼんをいただき、生きる
喜びをしみじみと味あつたのである。

やがて多くの戦友を失つた悲しみが入り乱れて、胸が
つかえるのを憶えた。我々はやつと浦賀に上陸して、な
つかしい故郷元田に帰ることができたのである。

あれからすでに三十年も過ぎてしまった。今では戦争
が夢のように思われてならない。

(五) 海軍 市野瀬 隆

早いもので、戦後すでに三十年が過ぎた今、当時のこ
とを考えてみると、戦時中は私と家族にとつて、あまり
にも苦しいことが多すぎたと思う。全く青春は戦争で明
け暮れしてしまつたのであるから。

昭和十四年一月、兄にすすめられて私は海軍を志願し
た。合格すると同年六月佐世保海兵団へ入団した。

二か月後、兄も召集令状を受け、大分聯隊へ入隊し、
長谷川部隊暗号係として中国大陸へ従軍した。

十一月、私は新兵としての教育を終えて軍艦八重山に
乗艦することとなり、第十七戦隊として南支那海の警備
についた。その結果支那事变従軍記章を拝受した。

昭和十六年海軍砲術学校に入学、卒業すると特務艦隊
良湖へ配属となった。同年六月弟春雄も兵役を志願し、
乙種飛行予科練習生として土浦航空隊に入隊し、これで
兄弟三人揃つて軍人となった。十六年の末に兄は一応解
除され、妻をめぐり、一時山林業をいとふんだ。

さて、特務艦隊良湖の初航海は、南方へと向つた。寄
港地としては台湾の高雄港、比島のマニラ、トラツク島、
夏島基地、セレベス島のマッカサル、占領後聞もないシ
ンガポール港、仏印のハイフォンであつた。ここで米を

積込呉港へ帰港。以来、呉港を基地に南方方面へつごう
十八回の航海をした。この間豊後水道通過の度に、又關
山に手を合わせたことを思い出す。

十八年九月、トラツク島付近で敵潜水艦の魚雷を受け
て艦は大破し、命からがら横須賀へ帰港、退艦のやむな
きに至つた。

兄は二度目の召集令状を受けて、比島方面へ従軍した。
私は高雄海兵団付で現地兵の新兵指導員として、一期生
二期生を修了させた。その後、二十年一月千葉の館山砲
術学校高等科練習生として入校し、同年四月卒業、佐世
保海兵団にて新兵指導教員として勤務中終戦となつた。

妹、文江は二十年四月満州開拓団に入り渡満した。こ
の間、十九年弟春雄がミンダナオ島で戦死、二十年兄も
ミンダナオ島アグサン州にて戦死という、奇しくもかな
しい運命をたどつた。兄弟妹四人出征して、二人を異國
の地に死なせてしまつた両親は、ずいぶんつらかつたと
思う。これにより私の家は大きく変つた。

母は現在の私を見て、兄は幾つ年上、春雄は幾つ下と、
いつも面影を偲んでいるようであつた。当時はよく仏壇
の前に坐つて、二人の写真に話しかけている姿を見
かけたものであつた。そして遺族扶助料よりかは、生きた
姿を見たいもんだと、言あめつつもりが、つい口に出て悔
やむことがあつた。

兄の遺児安子も、今では二児の母となつてゐるが、父
の顔も知らぬまま、昭和五十年代を生きてゐる。
まことに、戦争の傷手は長く尾をひくものである。
つくづく思うものである。

(この項おわり)